

平成20(2008)年度 卒業研究要旨

11050001 秋元沙友里

「年代・職業・男女別にみたストレスの違い」

年代というより学生と社会人とでの職業別にみたストレスの原因に違いがあり、学生は「人間関係」、「精神的」が最も多かったのに対し、社会人は「社会的」、「人間関係」が多く、また「人間関係」でも学生は「友人関係」、社会人は「職場での人間関係」という大きな違いがあることがわかった。発散方法では男女共に「遊ぶ」が多く、「友人と話す」が男性は少数意見だったのに対し、女性は「遊ぶ」に次いで多かった。ここに最も大きな違いがあることがわかった。

11050002 芦名 幸菜

「菓子の商品名から見た認知言語学的考察」

マーケティングにおいて、商品ネーミングは販売実績を左右する重要な要素のひとつである。売り手の実績に基づいた戦略と、消費者の思考とのズレを明らかにするため、20代～50代までの50名を対象とし、アンケート調査を行った。その結果「濁音」と「長音」ばかりが注目を浴びていたが、他にも「ナ」と「ラ」を含む商品名も有力だとわかった。これは商品イメージに結びつきやすい言語音やリズムが影響していることを示唆している。

11050003 阿曾 直美

「文章表現能力低下の実態と指導——意見文作成の調査を通して——」

子どもの「学力低下」が進んでいると言われるが、実際には数値としての「学力低下」は見られず、「文章表現力」の低下が「学力低下」と思わせる原因であるとわかった。そこで小学生・中学生9人を対象に、作文指導を含む二度の意見文作成による調査を行った。この調査の結果、意見文は著しく変化し「文章表現力」の向上がみられ、ワークシートによる構成・内容の事前指導が有効であることがわかった。

11050004 飯田真由美

「『らしい』と『ようだ』——日本語学習者への指導法——」

普段、私たちは当たり前のように「らしい」と「ようだ」を使い分けているが、それは無意識にやっていることである。両者にどんな意味の違いがあるのかを明確にし、その上でどのように学習者に教えるのが効果的なのか本稿では考えていくことにする。なお、「らしい」「ようだ」のいずれも複数の意味を持っているが、今回は推量という点での「らしい」「ようだ」の意味に絞り、両者の意味の違いや教え方を取り上げることにする。

11050005 飯塚 弘美

「日本語のオノマトペと韓国語のオノマトペ」

日本語は、他の言語に比べるとオノマトペが多いと言われていて、また、私自身も会話の中で多くのオノマトペを使っている。だが、本当に多いのだろうか。本稿では、日本語と似ていると言われている韓国語と比較する。オノマトペを抽出するために、韓日辞書と日本語の国語辞典の最初から最後までの見出し語や例文を抜き出し、日韓両語のオノマトペの量の比較や形態の比較、意味の比較、文法の比較をして違いを明らかにする。

11050006 五十嵐徳史

「若者言葉」

普段私たち若い世代が、なにげなく使っている「若者言葉」。テレビやニュースなどのメディアから受ける印象は、言葉の乱れの要素や原因と感じ取れる。実際、私自身も「若者言葉＝言葉の乱れ」のような印象が強い。世間では、若者言葉についてどのような考えを持っているのか、また現代の言語社会にどのような影響があるのか調べた。文化庁による「若者言葉に対する世論調査」を中心に、自分なりの考察をした。

11050007 伊藤 高志

「伝統色名から見る日本人の価値観」

この論文はテレビや小説で、名前だけを知る色や身近な色について記した。

名前だけを知る色については、具体的なイメージを持ってもらう為、身近な色については、より深く知ってもらう為、語源や名前の由来となったものについても記した。

色見本や写真を用いて幾つかの色を紹介するが、色見本についてはインターネットの JIS 規格によるものであり、他の基準では紹介した色名を持つ色と別の色の名前となることがある。

11050008 今井 雄一

「敬語」

日本語の中の敬語について、私達が知らないことは数多くある。まず、敬語自体がなぜあるのか。その敬語が示す役割とは。日々慣れてしまっている日本語の中の敬語に着目し、敬語本来の持つ意味や、基本的な使用の仕方などから応用的な使用法、さらには敬語自体の重要性について触れていき、私自身だけでなく、日本語を習っている全ての人にとって「敬語」が素晴らしいものであることを研究する。

11050009 岩瀬 仁志

「意味が変わっていった日本語」

現在では、本来の意味とは別の意味で使われている日本語も増えてきている。

そこで、今回、それらの言葉から10個と、挨拶の表現一つを選び、それらの言葉を、10代と20代の男女数名に、アンケートとして渡し、どのような結果となったかを記していき、どのような傾向になっているのかを考察していく。また、回答には無記入も用意しておき、これらの言葉が、どれだけ日常に広まっているかも考える。

11050010 岩永 南

「名づけの変化 ― 幅の広がる命名 ―」

近年“個性的”な名前の増加とともに、ふりがななしでは読めない名前が増えてきている。名付けのルールに関しては昔から変わらないのに、どうしてこのような傾向が生まれたのだろうか。名付けのルールや人名用漢字の変遷といった基本的な名付けに関する事柄をまとめていくとともに、最近の名付けの傾向や重視する点、人気ランキングなどを踏まえて今と昔を比較しながら多様化した背景を考察していく。

11050011 岩本 直子

「『ピーナッツ』が愛され続ける理由」

日本では誰もが知っているであろうキャラクターのスヌーピー。しかし、そのスヌーピーは『ピーナッツ』という50年にわたって描かれてきた新聞連載コミックに出てくる登場人物の一部にすぎない。その『ピーナッツ』が、スヌーピーを始めとしたキャラクターグッズを含め、愛され続けてきたのは、コミックの作者であるチャールズ・M・シュルツの人生が大きく反映されていると考え、愛され続ける理由を研究した。

11050014 植草 晴菜

「表現の規制は必要かどうか ― 単純所持の禁止の危険性 ―」

近年、青少年に与える悪影響を懸念し、マンガやアニメへの表現の規制が厳しくなっている。それは作品上の表現だけでなく、それを購入、所持する消費者にまで規制の手が伸びている。「単純所持の禁止」だ。マンガ大国である今の日本で所持を禁止することは大変厳しいのではないか。本稿では「単純所持の禁止」が盛り込まれた法律を中心に、本当にその禁止要項が必要かどうか、海外で起きた事件を参考に問題点を挙げて論じる。

11050015 薄井 千春

「日本人の名字と家紋」

日本人の名字は約29万種ある。そのうち、全国で多い名字は「佐藤」である。東京都の葛飾区新小岩三丁目に絞り調査を行い、この地域に多い名字はなにかを調べる。その調査結果と全国の名字ランキングや関東地方のランキングを比較し、名字の傾向は同じなのかを調べ、研究していく。

また、どの家にも必ずある家紋だが、実は名字と深い関係がある。家紋の歴史をさぐりながら、

二つの関係性を研究していく。

11050016 内田 千鶴

「二言語話者によるコード・スイッチングの実態 ― 要因と使い方に注目して ―」

国際化が進む近年、自分の母国語とそれ以外の言語を話すバイリンガル（二言語話者）も増加傾向にある。この二言語話者同士の会話のなかで発生するのが、コード・スイッチングである。本稿では、これまでにあげられているコード・スイッチングの要因と使い方、および、出現規則について実際の使用状況との比較をし、その実態を明らかにすることで、これまで提唱されてきた規則以外の傾向もあることを指摘したい。

11050018 大塚 梓

「日本文化にみる日本人のしきたり ― 年中行事に込められた思い ―」

戦後の日本人は、あらゆる便利なモノを生み出し、ひたすら生活の快適性を追い求めてきた。しかしその一方で、それまで大切に育み、受け継いできたさまざまな伝統を置き去りにしてきてしまった面がある。今では、「日本人は自分たちの国の文化をよく知らない」と、他国の人から言われてしまうほどだ。そこで、私たちの先祖の願いや思いが詰まった、すばらしい日本文化を見直すべく、その由来や変化を調べてみたいと思う。

11050019 鴛海沙知子

「国語辞典と新聞からみた摂食障害」

私は以前から精神病や心身症など、心の病と称されるものについて関心があった。その中でも、拒食症・過食症などの摂食障害に注目し、言語の面から調べてみる。

摂食障害には拒食症と過食症がある。国語辞典による記述と、実際の新聞における使用率や使用例をみて、それぞれの認識のされ方について調べ、比較してみた。

その結果、「過食」と「過食症」では、意味に差が出ることがわかり、意味の細分化が必要だと思われる。

11050020 小原 幸恵

「日本人女性の痩身願望の実態と適切な健康管理」

現代の日本では痩せた女性が美しいとされる傾向が強い。女性たちは「痩せたい」と口々に言う。では、どれほどの女性が痩せたいと感じているのだろうか。食わずに痩せようとするのは簡単だが、危険と隣り合わせの状態にある。心身共に美しい身体を目指すには、正しいダイエットが必要である。適切な痩せ方をすることは健康を維持することにつながる。健康で美しくあるために、現代の日本人女性には何が求められているのかを研究する。

11050021 恩田 昌英

「女房詞について」

言葉は時代とともに変化してきている。しかし、普段当たり前のように使用している言葉の中には、室町時代ころから使われ始めた「女房詞」というものがある。

女房詞がどのように発生し、どのくらい使われていたのか、また現在はどのくらい残っているのか、先行研究をもとにして検証していく。

今現在使用されている女房詞は少ない。今後もこの言葉というものは様々な変化を遂げ、消失と誕生を繰り返していくのかもしれないと感じた。

11050023 金子 真也

「明治時代に生まれた言葉の背景と使われ方」

本稿は明治時代に生まれた言葉の背景と使われ方を記すものである。まず、明治時代に作られた新語を新造語、借用語、転用語の3つに分類する。その後、3つに分類されたそれぞれについて言葉の由来、作られた理由、辞書での意味、その言葉が日本でどのように受け入れられたのかを記した後、それぞれの分類ごとに考察をしていくものである。最終的に全体的に見て気づいたこと、感じたことをまとめるものとする。

11050024 神木 瞳

「自己表現能力の低下と人間関係の悩み」

近年、無差別殺人が続発している。犯人に共通するのは、孤独感。人付き合いが苦手で友人がいなかったというパターンが多い。

人間関係を構築する上で欠くことのできない「ことば」。たくさんの人とことばを交わす中で、コミュニケーション能力は磨かれていく。しかし、犯人は皆、人との対話を避けていたという。そして孤独感が生まれていった。ことばの力によって孤独感から救い出し、事件を防ぐことはできなかったのだろうか。

11050025 喜多野菜生

「日本語における擬音語・擬態語の役割」

日本語は世界でも有数の擬音語・擬態語の豊富な言語であり、日常の会話など言語活動で頻繁に使用されている。このように私達にとって身近な擬音語・擬態語であるが、使っている人はみな同じ意味にとらえているのだろうか。もし、擬音語・擬態語がなかったらコミュニケーションを行うときどうなるのか。本研究では、擬音語・擬態語を使わないで表現するという言い換えのアンケート調査から、擬音語・擬態語の役割を考えた。

11050026 倉島 佳代

「オーストラリアにおける日本語教育実習について ― CQU の日本語専攻学生を対象に ―」

2006年8月にオーストラリアにおける海外日本語教育実習に参加する機会をいただいた。直説法と間接法の両方を使い、会話実習を行った。貴重な経験の実践報告をし、学生や担当教師の先生方からのアドバイスを踏まえ、活動を振り返る。その結果、筆者が得たこと、反省点等、そして今後の課題を提示する。

11050027 栗田亜希子

「ダイエットという言葉の間違ったとらえ方」

本来の「ダイエット」という意味が現代ではどのように形を変えてきたのかを対象に、歴史的な変遷も含め研究した。

本来ダイエットとは「生活様式」を意味するギリシャ語「diata」が「日常の食べ物」という意味に転じ、英語「Diet」が誕生。そこから「肥満」に対する「食事療法」といった意味を持ち、現在では「ダイエット＝減量」という意味で間違っ使用され、英単語の意味とはかけ離れた和製英語と化している傾向にある。

11050031 小路 健美

「HIPHOP 文化の歴史と日本への参入、今後の展望」

「HIPHOP とは、音楽のジャンルをさす言葉である」と誤解している人が多い。しかし、実際はラップやDJ、グラフィティや、ブレイクダンスを軸に、服装や、ライフスタイルなどを含めた文化の総称である。そのことから、まず、HIPHOP とはどのようなものであるかを調査した。そして、その歴史について調べ、時代背景とHIPHOP の歴史を照らし合わせることから、HIPHOP の今後の展望について考察した。

11050032 國府田春奈

「女ことば」について

現代では、女性による「女ことば」の使用が少なくなった。彼女たちは「男ことば」や男女間に隔たりのない「中性化」された言葉を使用している。そして、文面からでは性差は全くといっていいほど感じられない。そんな中、「女ことば」を使っている人たちがいる。「ニューハーフ」という新しいジャンルの確立によって消えかけた「女ことば」を使い、彼女たちを象徴させる言語となった。性差やジェンダーの問題を取り上げまとめた。

11050033 小島 彩乃

「学校内いじめの一考察」

学生時代、誰でも一度はいじめを見かけたことがあるはずだ。言葉でからかう軽いものから、暴

力による肉体的いじめ、複数人によって行われる無視といった精神的いじめなど、その種類は多岐に渡る。いじめは悪いものだと認識していながら、それを周りに訴えられた人は一体何人いるだろう。何故、見つけた時点で誰も動けないのか。いつまでもなくならないのかを、それぞれの視点と教師との関係を交えて考察していく。

11050035 後藤 泰介

「ニート ― ニートを減らすには ―」

近年はニートの増加が社会問題化している。本稿では、ニートを減らすにはどうしたらよいかを探るために、雇用形態と収入格差、各国の施策、ニートの生活実態などの観点から、資料の調査を行った。その結果、ニートが増える原因は親の厳しさの欠如にあることがわかった。このことから、国や地方公共団体の行う自己啓発的施策よりも、健全な親子関係の形成をサポートする体制づくりのほうが効果がありそうだということがわかった。

11050036 後藤 学

『徒然草』はなぜ今も読まれるのか

『徒然草』は、鎌倉時代の後期に、吉田兼好によって書かれた随筆である。日本の随筆文学の代表として時代や国境を越えて読み継がれ、さまざまな研究や享受がなされてきた。なぜ、『徒然草』は成立から700年近く経った今も、多くの読者に読まれるのであろうか。本稿では、その文学的意義について、「古典教材としての『徒然草』」、「実用書としての『徒然草』」という二つの視点からの考察を試みた。

11050038 酒井 秀人

「授業時における友達ことばについて」

日本語教育の授業は通常「です・ます体」で展開されることが多い。その中で、「です・ます体」ではない、話しことばである「友達ことば」が日本語の授業で占める位置と割合がどういったものなのか、日本国内と海外では扱いがどのように違うかなどの疑問を、筆者の日本語教育の教壇実習経験からの考察や、実際に働かれている日本語教員の先生方、現在日本語を学習している学習者に話を伺いながら調べた。

11050039 酒井 優佳

「ケツメイシの歌詞に見られた音符付与率 ― 自立拍と特殊拍に注目して ―」

ケツメイシの歌詞に対する音符付与率について、まず、童謡とMr.Childrenの歌詞に対する先行研究と同じ調査方法で分析を行い、ケツメイシだけに見られる全体の特徴と1曲ずつの特徴を論じた。その後、日本語律文の観点から曲のテンポと休止の関係について調査した。その結果、ケツメイシは長音を多く付与する傾向が非常に強く、テンポが速くなるにつれ、休止の数が増え、リズム

ムの歯切れを良くすることなどの特徴が明らかになった。

11050040 櫻岡 聡行

「江戸時代の服装の変遷について」

江戸時代は、徳川家康が征夷大将軍に任じられ、江戸に幕府が開かれたときを始まりとし、慶応3年（1867）に大政奉還するまでのことである。その歴史の区切りの中で一番長い時代での服装の移り変わりは、めまぐるしいものだったに違いない。そこで、当時の人々はどんな思いできものを着て、政治や時代とのかかわりはどんなことであったかを知りたいと思い、この研究をしてみようと思った。

11050041 佐々木康之

「急成長スポーツフットサル」

2002年日韓ワールドカップをきっかけに日本のフットサルは人気急上昇してきた。それはやはりフットサルの手軽さにあることは間違いない。コートが狭いので年齢、性別問わず誰にでもできるという良さが人気の上ってきた理由である。人気が上がると、競技人口も増えてきたことにより、フットサル施設も多数増えた。日本のフットサルだけでなく海外にも目を向け、様々な視野からフットサルを見ていく。

11050042 佐藤 麻丹

「漫画における男子高校生キャラクタータイプと役割語」

漫画や小説などの作品に登場する人物は、私たちが普段の生活に用いているものとは異なる「役割語」と呼ばれる言語を使用している。

この役割語がどのような働きをしているかを、漫画の登場人物に多い「男子高校生」を例にして取り上げる。SFやファンタジー等の特別な舞台設定ではなく、私たちが生活している現実世界に近い作品に絞って、作品別、登場人物別、機能別、対人関係別に比較して考察する。

11050044 椎名 恵

「室町時代から江戸時代初期における『こそ』の破格化の表れ」

現代において、上に来る語を強調するのに用いられる助詞の「こそ」は、古くに遡ると、活用語の已然形と呼応し、係り結びという形式をとっていた。しかし、その係り結びの形式は時代が進むにつれその形を崩していき、現代においてその形式はほぼ消滅している。

今回、その「こそ」の係り結びの形式の破格化の進行を、室町時代から江戸時代初期の物語物というジャンルに範囲を絞り、調べていく。

11050045 朱 貞恵

「ボーイッシュの広義的な使用について」

本稿では、日本人がよく使う「ボーイッシュ」の意味や対象を、2つの検索サイト Yahoo.co.jp と Google.co.jp の例を収集、分析した。その結果を、辞典の語釈との対照を通じて「ボーイッシュ」が実際によく使われている分野、そして、それ以外の分野を集計し、これらから「ボーイッシュ」の使い方の傾向について考えたこと、外来語について考えたことを述べた。

11050047 瀬尾友香理

「日本人の美意識」

日本人の美意識は、時代の流れとともに変化してきた。そこで今回は日本人の美意識の中でも、美人観や美容に関する歴史（化粧・ファッション）とその変遷について調べた。そして、大学内で20代の男女に美に関する意識アンケートをとったところ、美人とは「外面的な美もちろん大事だが、内面の美しい女性は表面に出てくるもの」という声が多かった。その結果、美人とは内面的な美を備えた女性だといえる。

11050048 関口 真伊

「敬語は必要か、不必要か」

いつの時代も、「言葉の乱れ」が話題になる。現在では敬語不要論者まで現れているが、敬語は本当に必要ないのだろうか。敬語のノウハウ本は多いが、敬語の必要性を説明する本は少ない印象を受けたため、今回調べることにした。

敬語と行動言語学の文献とドラマ「3年B組金八先生」の昭和と平成の登場人物の言語行動を参考に、敬語から人間関係の構造の変化状況を観察し、敬語の必要性を考えた。

11050049 蘇 暁翠

「ニューカマーの子どもと日本語教育 ― 日本語指導における母語使用の必要性 ―」

本論文では、ニューカマーの子どもたちの教育問題について考察するため、子どもと日本語指導者を対象に面接調査を行い、実際に外国人の子どもが日本語学習および教科学習をするうえで、どのような問題に遭遇するかについて、調査した。その結果、多様化する外国人の子どもに対応するためにこれまで蓄積されてきた指導方法や教材の改良や開発を進めていくのと同時に、母語使用を考慮した日本語指導を行う必要があることが分かった。

11050050 曾我 浩世

「ローマ字略字」

現代の若者言葉として登場したローマ字略字だが、どのように使用されているかを調べ、そしてどんな特性があるか、ラジオや雑誌などから言葉を収集し検証した。その結果、ローマ字略字は書

く場面に多く登場し、隠語のような特性を持っていることがわかった。同じローマ字略字に違う意味を持たせている場合もあり、決まった意味を辞書のようにまとめるのは難しい。今後も変化を遂げそうである。

11050051 孫 荃麟

「中国人日本語学習者による特殊拍の知覚判断方略について ― 長音と促音 ―」

本研究は、単音、長音、促音の持続時間および音節間の持続時間に焦点をあて、日本人母語話者の知覚判断の特徴を明らかにした上で、中国人日本語学習者を対象に聞き取り実験を行い、学習時間数別・地域別の知覚判断の方略を分析した。

聞き取り実験から、学習時間数 5~6 年の中国人日本語学習者群の中には、日本人と同様の知覚判断の方略で促音と長音を知覚している人がいたが、それ以外は各自の方略を使っていることがわかった。

11050052 高木二三也

「Mr. Children の軌跡」

Mr. Children の CD 総売り上げ枚数が 5000 万枚を突破した (B'z に次ぐ歴代 2 位)。ミリオンセラーはアルバム 11 作、シングル 10 作。この数字も凄いが、ミスチルの恐ろしさは 15 年以上も第一線で「記録」と「記憶」の両方に残る音楽を作り続けていることだ。時代と向き合ったサウンド、恋から愛へと変化する歌詞、圧倒的にパワフルなメロディ。音楽史のトップを走り続けるモンスターバンドの歴史を振り返った。

11050053 高橋こずえ

「コーヒーと文化」

国が違えば文化が違うように、コーヒーの飲まれ方や好み、市場動向も、世界各国で様々に異なる。日本でも独自の個性をもったコーヒー文化が培われてきたが、近年の外資系カフェなどに代表されるようにコーヒーの楽しみ方は多くのバリエーションを持ち始めている。コーヒーの品質をより高く維持しながらも一人でも多くの方にその楽しさを伝える「コーヒーマイスター」。マイスターに必要な知識とコーヒーの歴史を述べる。

11050054 湯浅 真唯

「育児」

私は、今年一月に出産を経験し、日々子供の成長を感じながら、育児生活を送っている。育児生活をしなが、改めて周囲の協力を感謝の気持ちや、子供を通して両親への自分に注がれてきた愛情というものを感じた気がした。乳児検診で成長の記録に喜び、熱、風邪、蕁麻疹で病院にお世話になる事があり、この約一年間母親として、沢山の感情を抱いてきた。

今回卒業研究において、私は育児生活をまとめた。

11050055 田中 直也

「KY はどのようにして発生したか ― KY 語の持つ表現効果と問題点 ―」

少し前に、若者間で「KY（空気読めない）」という、ローマ字の頭文字だけをとった略語が流行り、2007年には、「ユーキャン新語・流行語大賞」の候補語にまでなった。これら、ローマ字の頭文字をとった略語が、どのような背景で発生したのか、今までの略語との違いを明らかにするとともに、ローマ字略語を使うことによる利点・問題点はこういったものなのかを解明するために記述した。

11050061 土居真由美

「三種の神器について」

天皇家にある神の依り代とされる三種の神器の鏡・玉・剣であるが、何故三つなのか、何故この三種類であるかを古事記と歴史的背景から考察した。

その結果、鏡・玉・剣は権威と王権と武力を象徴するとともに、国産みをした伊邪那岐命の子等、三貴子である天照大御神と月読命、須佐之男命をも象徴することが判明した。そして、三種の神器は天皇統治の基礎を固めるため天武天皇が設けたとも考えられる。

11050062 中川 美穂

「葬儀の移り変わりについて」

「なぜ葬儀を行うのか」、「葬儀はいつから始まったのか」という疑問から葬儀の歴史を振り返る。の中で、葬儀業者の需要の増加・事業拡大のきっかけを住環境・社会状況等の変化を押さえ、アンケート結果や図表を用いて考察する。

時代の変化に伴い、葬儀に対する考え方や、葬儀と密接な関係にある墓に対しても考えが変化しているに違いない。この状況に、私たち日本人はどのように捉え、どのように対処しているのかを調査した。

11050063 中島 舞子

「初級の外国人学習者が聞きとる言葉と学習環境」

外国語を学んでも身につかない、その場面になると使えないということがよく起こる。これはどこに原因があるのだろうか。この卒業研究では、外国語学習者が「聞く・話す」の面で、学習する言葉と結びつけることが重要だということを検証するため、初級の外国語学習者にアンケートをとり、考察をした。

どこで誰の言葉を聞き取っているか、そしてそれはどのような生活をしているのかを調べ、学習者にとって理想的な学習環境を考えた。

11050064 中村恵里香

「電子掲示板で使用される用語について」

現在日本国内のインターネットで、一番大きいとされる電子掲示板（2ちゃんねる）。その中で使用されている言葉の多くは、理解がしにくいものばかりである。その2ちゃんねる用語についての解説や、ジャンル内によっての用語の変化、使用頻度などの違いがあるのかを見ていこうと思う。

また、他の掲示板で2ちゃんねる用語を使用すると、なぜ、嫌がられてしまうのだろうか。用語を理解すると同時に、考察していこうと思う。

11050065 中村 由美

「幼児語は必要なのか、なぜ使われ続けているのか」

幼児語は子どもの頃、誰でも使用したことばである。しかし、大人になるにつれて使用することはなくなり、そのほとんどを忘れてしまう。果たして、そのような幼児語は必要なのだろうか。幼児語の語形形成や音韻構造を調べることにより、誰にとって必要なのか、また、幼児語は何のために生まれ、どのように変化を遂げてきたのかなど江戸時代の幼児語を参考に考えた。

11050066 野口 理沙

「中国人から見た日本人のしぐさ」

コミュニケーションには言語、非言語の2種類がある。日本人の非言語コミュニケーションを最も身近な外国人である中国人が見たらどう受け取り、どんな意味だと解釈するのか、またどう思うかなどをアンケートにより調査した。異文化間でのコミュニケーションでは、まず、お互いの文化が異なることを学び、それを理解しようとするのがよりコミュニケーションを円滑に行う為に重要となる。

11050068 埜 沙也加

「漂流するコミュニケーション — コミュニケーションとディスコミュニケーションの考察から考える —」

近年になって無差別に人を殺す事件が多々起こるようになった。そこで、秋葉原通り魔事件、茨城連続殺傷事件の事件を分析し、事件の原因を突き止めたいと考えた。

第1章では、秋葉原通り魔事件の概要、容疑者について取り上げ、第2章では、茨城連続殺傷事件の概要や、容疑者について、第3章では、類似点を、第4章では、事件の問題点を挙げ、終わりに改善点を書きたいと思う。

11050069 早坂 直記

「ばっくれる」とはどのような言葉か

『現代用語の基礎知識 1991年版～2000年版』の中の若者用語を私自身が分類したところ、どの

年でも使用頻度の高い言葉が見つかった。それが「ばっくれる」である。この言葉に焦点を当て、言葉の由来を調べていくと、ある疑問が生じた。その疑問を、言葉の意味・語の成り立ち・語源から調べていき、「ばっくれる」という言葉を詳しく見ると、意外な事実がわかる。そこから、「ばっくれる」の真の意味を求めていく。

11050070 笛田奈緒美

「新丁寧語は一般化されていくのか — 若者の視点から探る —」

本稿では、近年、接客の場において、多く耳にするようになった間違っ言葉遣いが、今後一般化されていくのかを明らかにするために、20代の若者を対象に許容度・使用度と、新丁寧語の印象の意識調査アンケートを行い、それらの言葉遣いが使われる背景を考え、一般化していくのかを調査した。その結果、多くの若者たちは「新丁寧語を認めていない」、「自分は使用しない」と新丁寧語に対して否定的な立場であることがわかった。

11050071 深澤 香織

「摂食障害者の9割が女性であるのはなぜか — 女性と摂食障害とダイエットの関連性 —」

近年、ファッション業界でスーパーモデルの痩せすぎを警告する報道がよくされている。スーパーモデルの極端な痩せ過ぎが、一般の人たちに悪影響を及ぼすというのだ。実際、行き過ぎたダイエットから摂食障害に発展する患者は年々増加しつつある。しかし、摂食障害者の発症者の9割は女性である。そこで男性と女性のダイエットと痩せに対する意識について研究して、なぜ発症者の9割が女性であるのかということについて論じる。

11050072 福村 里奈

「男女の色の知覚力」

色の見え方、捉え方を日常から疑問に思っていたので、今回卒業論文にしたいと思った。明海大学のクラスメイト・サークルの仲間・学内の学生男女30人にアンケートをとりまとめた。その結果、RGBそれぞれの色の数値により、色の判断・識別の基準値を設けることができるということが明らかになった。そして、男女により色の知覚力が違うということも明らかになった。

11050074 前田 遥

「『カフェ』と『喫茶店』」

「カフェ」と「喫茶店」。これはこれまでの飲食業界を振り返ったとき、時代を象徴する外せないキーワードではないだろうか。

近年、「カフェ」と呼ばれる店が増え続け、その一方で「喫茶店」と呼ばれる店は減ってきている。私自身も一般的に「カフェ」と呼ばれる店に行くことが多い。幼い頃、よく父や母に連れて行ってもらったのは「喫茶店」だった。

ではこの「カフェ」と「喫茶店」の違いはなんなのだろうか。

11050075 松永ゆかり

「日本人とチョコレート」

現在、コンビニ・スーパー・売店、どこに行っても売っているチョコレート。子供から大人まで誰にでも愛されているチョコレート。一口食べれば一瞬で幸せになることができるチョコレート。もちろん昔から日本の食べ物だったわけではなく、外国からやってきたものだ。一体チョコレートは日本にどのようにやってきて、昔はどのような存在だったのか。そして、現在に至るまでの日本のチョコレートの歴史をたどる。

11050076 丸山マリア

「日本語学習者のニーズ」

日本語を母語としない日本語学習者は年々増加している。しかし日本語は、英語はもちろん、スペイン語、ドイツ語、フランス語といったヨーロッパ言語よりも限られた地域で話されている言語である。

この小さい島国でしか使われていない日本語を、なぜ学習するのか、どんな目的で日本語を取得するのか、日本語学習のニーズについて研究してみようと思う。

11050077 三浦 大貴

「日本人の日本に対する意識と課題」

世界では、日本のソフトパワーと言われる、サブカルチャーが注目を集めている。そこで、本論文では、日本人は日本に対して、どのような意識を持っているかを明らかにすることを目的に、主に学生を対象にアンケートを実施した。

その結果、日本人は日本に対して、意識しているわけでもなく、知識が薄いということがわかった。

また、私がなぜこの問題に観点をあてたか、今の日本の現状などについて詳しく述べた。

11050078 宮澤 由佳

「昆虫名の語種について」

私は、新潮国語辞典を使って、昆虫の名前について和語、漢語・外来語、混種語のどの語種が多いかを調べた。

その結果、調べた全70種類中、和語が最も多い50種類で、混種語が17種類、漢語・外来語が3種類だった。和語の例として、アブラゼミ・トノサマバッタなどがあり、混種語の例としては、アゲハチョウ・ショウリョウバッタ・ゲンジボタルなどがあつた。漢語・外来語は、ゲンゴロウ・ハンミョウ・ギフチョウのみだった。

11050079 望月 夏葉**「児童が学ぶ日本語教育」**

海外の日本語学習者その中でも、児童の学習者について調べたいと思った。

「海外児童の外国語教育の中で、日本語教育は、どのぐらいの位置にあり、どのような勉強がされているのか」「その日本語はどのような目的で、学習者は学んでいるのか」を調べた結果、日本語教育が盛んな国、上位5ヶ国を調べてみると、日本語教育は、第2外国語として取り入れられ、学習目的としては進学や就職のために学ぶといった答えが多かった。

11050080 森田 亮**「野球が国民的スポーツとなった背景とこれからの展望」**

この論文は、野球が日本に伝来してからどのような経緯で今日のように広く普及したのかを、日本で野球が形成された背景を分析しながら明らかにしていく。野球が伝来した過程や、高校野球の文化、日本のプロ野球、日本人選手のMLB挑戦への注目を分析し、野球が今後日本でどのように発展していくかを考察する。

11050081 山田 佳苗**「江戸文化を支えた吉原遊郭」**

遊郭と聞いて、すぐ思いつくのは風俗や売春などのいかかわしいことであろう。現代ではそう言われていてもしょうがない。だが、実は、吉原遊郭は江戸の文化の中心といっても過言ではない場所であったのだ。変化や進化を遂げ、吉原の文化は現代に受け継がれてきた。江戸文化を語る上で、吉原遊郭の存在を無視できないのが、吉原遊郭のすごさである。吉原遊郭は誰もがうらやむところに違いない。そのすばらしさを今回解明したいと思う。

11050087 和田めぐみ**「日本のマンガ文化、実績と歴史」**

日本のマンガは、戦後日本が生み出した日本の誇れる文化の一つと言えよう。現代では老若男女、職業、年齢問わず、誰でもマンガを楽しむ事ができる。マンガは映画や文学と並び、人々のエンターテイメントを豊かにし、日本社会に変化をもたらした。では、どのようにして今日の日本マンガ文化が形成されていったのか。日本マンガは海外にも広がりを見せているが、その人気はどのようなものなのか。いくつかのマンガを例に論じていく。

11050905 高森和香奈**「現代における漢字使用の特徴」**

近年、パソコンや携帯電話の普及によって、字を書く環境が変わってきた。手書きをすることが少なくなり、パソコンや携帯電話で文字を打つことが多くなっている。そのことによる、漢字への

影響について考える。また、その一方で、日本漢字能力検定（漢検）の志願者と合格者は年々増加している。そのため、合格率や漢検受験の目的などから、現代人の漢字に対する意識を調べる。これらのことから、漢字使用のあり方について述べる。

11050906 陳 曉斌

「北京語母語話者の日本語発話時における誤用」

中国人日本語学者における誤用について調べた。中国人学習者にとって、日本語の自動詞と他動詞を区別することは難しい。その原因は、中国語では自動詞と他動詞の区別は文字ではなく、音声によって区別していることがわかった。

また、助詞「は」と「が」の誤用と漢字による誤用についても分析し、漢字は中国から輸入したものであるが、同じ漢字でも、日本語としての意味と中国語としての意味に関する相違点を紹介した。